古典的経験論と自然主義*

冨田恭彦

クワインは「経験論の五つの里程標」の中で自らの経験論の立場を論じるにあたり、古典的経験論から五つの方向転換を経たものとしてそれを説明している。彼は論文冒頭で次のように述べている。

経験論は、過去二世紀の間に、五回に亙ってよりよい方向へと舵を切り直した。一つ目は、観念から言葉への方向転換である。二つ目は、意味論的焦点を名辞から文へと移したことである。三つ目は、意味論的焦点を文から文のシステムへと移したことである。四つ目は、モートン・ホワイトの言葉を借りれば「方法論的一元論」――つまり、分析／総合の二元論を捨てたこと――である。五つ目は、自然主義――つまり、自然科学に優先する第一哲学という目標を捨てたこと――である(1)。

このクワインの図式では、自然主義は最後に登場する。しかし、私見によれば、自然主義はすでに最初から経験論の根幹をなしており、『人間知性論』に見られるロックの認識論はこの性格を端的に示していた。しかも、クワインが自らの論著で度々言及している「自然科学に優先する」ところの「第一哲学」というのは、デカルトの主張したタイプの第一哲学のことであるが、そのデカルト自身の考えを詳細に検討すると、そこにもまた、「自然科学に優先する第一哲学」というデカルトの公式的主張とは裏腹に、自然主義的論理を見て取ることができる(2)。つまり、近代の経験論はもともと自然主義的であったというのが私の主張なのだが、それはいわゆる「経験論」の特徴というよりも、デカルトがその新たな用法を確立していった「イデア（観念）」を核とした考え方、つまり、のちに「観念説（theory of ideas, ideal theory）」と呼ばれることになったものの特徴であったと考えられる。しか

し、ここでは（「古典経験論と分析哲学」という与えられたテーマに合わせて）ロックおよび彼以降のいわゆる「経験論」を中心に、話を進めることにする。

まず、クワインとロックの関係を念頭に置き、ロックの認識論がクワイン的な意味で自然主義的性格を有するものであったことを概観する。そして、続く数節で、その視点からすればバークリやヒュームやカントがどのように見えるかを論じる。カントはもちろん、イギリス経験論に属する哲学者ではないが、カントの認識論の構図は、ロックとは性格を異にする部分を多々持ちながら、ある意味できわめてロック的である。したがって、カントの見解をクワイン＝ロック的な自然主義的視点から見直すことにはしかるべき意味があり、しかも、それによってある興味深い事態が浮かび上がってくると、私は考えている。

1　ロックの自然主義

ロックの観念説は、「物そのもの」、「観念」、「心」の三項からなる枠組みを持っている。観念にはさまざまな種類のものがあるが、今、感覚の観念、つまり、感覚によって得られるとされる色や味や形や大きさなどの観念に話を限定すると、そうした観念は、心の外に存在する物体、ロックがときおり「物そのもの（Things themselves）」と表現するものと、ある種の因果関係を持っている。つまり、そうした観念は、物そのものから何らかの刺激が感官に与えられ、それが運動の形で脳にまで伝達された結果、それに対応してわれわれの心の中に生み出されるというのである。こうして心の中に生み出される観念こそが、ロックによれば、感覚知覚におけるわれわれの心の「直接的対象」である。

ロックは粒子仮説を最良の仮説として受け入れており、そのため、物そのものは、いわゆる一次性質と、それに基づく能力のみを有する微小粒子の一つ一つ、もしくはその集合体とみなされる。そして、物そのものは、心の直接的対象とはならず、心の直接的対象である観念が、それを間接的に表象するとされる。

ロックのこの三項関係的■式、つまり、物そのもの、観念、心からなる図式は、古くから多くの人々がこれを懐疑論的なものとみなしてきた。観念が心の直接的対象であるのなら、物そのものの存在や在り方がどうしてわかるのか、というわけである。観念は、物そのものと心とを隔てるヴェールとみなされ、そのため、彼の観念説は、「知覚のヴェール説」とか「観念のヴェール懐疑論」とか呼ばれることになった。しかし、このような解釈は、ロックの観念説の基本的性格を根本的に見誤ったものと言わなければならない。そこには、何よりもまず、「仮説」についての理解が欠落している。

議論の便宜上、われわれが日常「物」とみなしているものを、「経験的対象」と呼ぶことにする。ロックの言う粒子仮説的な「物そのもの」が、色や味や匂いなどを持っていないのに対して、われわれが日常「物」とみなしているものは、形や大きさなどの「一次性質」のみならず、色や味や匂いなども持っている、と通常考えられている。この経験的対象の

織りなす諸現象を説明するのに、直接的には知覚不可能な、一次性質と能力のみを持つ粒子を、経験的対象のいわば向こう側に措定するのが、粒子仮説、およびその原型である古代の原子論の基本的発想であることは、言うまでもない。つまり、経験的対象に対して、新たにあるタイプの「物そのもの」をその向こう側に措定することが、粒子仮説の基本である。

こうして、新たな「物そのもの」が措定されると、それに応じて、従来「物」とみなされていた「経験的対象」は、その地位を変更しなければならない。経験的対象は、知覚されるさまざまな性質の集合体であり、その諸性質は、新たに措定された「物そのもの」からの触発を感官が受けた結果、知覚されるものとみなされることになる。ロックは、こうした種類の〈心が直接知覚するもの〉を、他のすでに内的とされてきた痛みなどとともに、心の内なる「観念」として扱う道を選んだ。従来外的な経験的対象であったものは、こうして、単純観念からなる複合観念の一種である「実体」の複合観念として、心の内に存在するものとしての扱いを受けることになる。

したがって、新たな物そのものが措定され、経験的対象が観念へとその地位を変更することによって形成される、ロックの観念説の三項関係的枠組みは、当代自然科学の仮説的探求の結果にほかならない。それは、科学理論に求められる諸現象の、説明可能性を満たす試みの結果として、成立したものである。これを懐疑論的とみなすことは、直接知覚しえないものを措定するという理由でもって、仮説的方法を退けることにほかならない。この見方からすれば、現代の原子仮説などもまた、懐疑論的営みとして退けざるをえなくなる。ロック解釈者に、仮説による方法を科学の重要な方法として捉える視点があるのなら、彼の観念説を「知覚のヴェール説」や「観念のヴェール懐疑論」として否定することは、そもそもできなかったはずなのである。

ロックの観念説のこうした特徴は、ドナルド・デイヴィドソンのクワイン批判を取り上げることによって、若干異なる角度から論じることができる。クワインは、『言葉と対象』に典型的に認められるように、「観察文」および「理論」に関する問題を考察するにあたり、「体表刺激」との関係においてそれを行おうとした。いわゆる「近位説（proximal theory）」である(3)。これに対して、デイヴィドソンは、証拠として機能するものを、身体表面よりももっと遠くに、つまり外部の物や出来事に位置づけるとともに、クワインの近位説を、懐疑論的立場として批判した。体表刺激が同一でも、それに対応する外界の物や事象が同一であるという保証はなく、体表刺激に依拠するのでは、外界の在り方は一意的に決まらない、と言うのである。そして、

> クワインの自然主義が外的状況と刺激との間に想定する因果的結合は、もしわれわれが近位説に■執するなら、われわれが公共的世界について、概して正しい見解を持っているということすら、保証しない(4)

と言う。

しかし、クワインが観察文や理論の問題を考察するのに体表刺激を選ぶとき、彼は、体表刺激がわれわれの直接的対象であるという理由から、そうしたわけではない。クワインの自然主義が言うように、外界から、刺激がわれわれの体表に与えられており、その結果としてわれわれは外界に関するさまざまな理論を持つようになるということを、科学がわれわれに示している。外的事物があり、体表刺激がそれとの関連においてあり、その体表刺激との関係において、外界に関するわれわれの見解が形成されるという、われわれを含む世界の全体像が、そこにはすでに与えられている。その全体像の構成要素である体表刺激を、クワインはあるプラグマティックな理由から、科学に関する自らの考察において取り上げたまでのことである。クワインにとっては、体表刺激が外界の他の構成要素とどのように関わっているかは、かなりの程度においてすでに科学が示すところであり、その前提のもとに、彼は体表刺激と理論との関係を考察する。したがって、近位説を採ることによって、懐疑論や相対主義に陥ることになるという反論は、クワインの自然主義の基本的性格を見誤っていることになる。

ロックの観念説の場合もこれと同じである。ロックもまた、新たな世界像の導入を前提した上で、改めて、われわれにとって直接認知できる「観念」との関係において、「知識」や「意見」を再考しようとしている。世界の仮説的考察が先行した上での観念説である以上、心の内なる観念をわれわれの直接的対象としたからといって、懐疑論の立場を採ったことになるわけではない。したがって、クワインの近位説の場合同様、これを懐疑論として退けるのは、ロックの認識論的考察の持っている自然主義的枠組みの基本を捉えていないと言わなければならない(5)。

基礎づけ主義者には、こうした考察は、ロックやクワインの自然主義の問題性を、一層鮮明にするものと映るであろう。先行する科学的知見を前提として科学を解明することが持つ「循環」という在り方を、それは明確に描き出すように見えるからである。けれども、こうした見方を当然のように思うのは、基礎づけ主義を自明のこととみなすからだと思われる。クワインが、背景言語と、それと密接に関わる背景理論の問題を意識していたように、われわれは基礎づけの営みそのものが前提しているものに、もっと敏感でなければならない。基礎づけ主義の古典的事例とみなされたデカルトも、すべてを疑ってゼロから始めようと試みるとき、すでに用いていた言語と、それと密接に結びついていた理論の一部を、その試みの内で使用せざるをえなかった。デカルトが十分に意識していたとは思われない基礎づけ主義のこの問題性に、基礎づけ主義者自身が注意を払うなら、先に述べたロックやクワインの自然主義に対しても、異なる判断がなされることになろう。

2　バークリ再考

ロックの経験論がもともと自然主義的であったという点については、以上で話を終えることにして、次に、これを前提すれば、バークリの immaterialism（ここでは「物質否定論」と訳しておく）がどのように見えるかを、次に見ることにする。

経験的対象とは異なるタイプの物を、新たに「物そのもの」として措定することにより、経験的対象が、「観念」として、他の内的なものとともに心の中に位置づけられたとすれば、バークリが、いくつかの理由からロック的な「物そのもの」の存在を否定しながら、経験的対象を相変わらず「観念」として扱い続けるのは、論理的に妥当性を欠くものと言わなければならない。そして、そもそもバークリは、外的な物の存在を認めないにもかかわらず、彼が『対話』で明確に提示した〈われわれの感覚の対象〉が〈心の中の観念〉にほかならないとする三つのタイプの議論は、すべて、心の外に物が存在することを前提とした議論であった。その一つ、私が「快苦との同一視からの議論」と呼んでいるものは、程度の高い熱さや冷たさを痛みと同一視することにより、それらを心の中の観念と結論づけるものであるが、そこでは、痛みが際立って内的な、心の中の存在であることが自明のこととされており、そうした心の中と対照をなす心の外の存在が当然視されたところで議論が進んでいる。

バークリの物質否定論は、この意味で、論理の歪みがあると私は考えているが、それとともに、バークリの見解には、もう一つの問題がある。それは、彼の心像論的観念理解である。

バークリは、観念を広義における「心像」つまり「感覚」ないし狭義の「心像」として扱っている。そして、このような心像論的観念理解をベースに、いわゆる「似たもの原理」一次性質／二次性質の区別に対する批判、マスター・アーギュメント等を用いて、物質否定論を展開した。例えば、観念を心像的なものとして捉える限り、色のついていない視覚的な形を思い浮かべることは、われわれにはできない。これが、『原理』「序論」で彼が展開した抽象観念説批判の一つの適用事例であることは、言うまでもない。

確かに、ロックの言う観念は、心像的なものを含んでいる。しかし、ロックは同時に、概念的なものをも、観念として扱っている。そして、これが重要なのだが、ロックが彼の観念形成説に従って自らの「物そのもの」の「観念」を形成するとき、その形成過程がまさに概念操作の過程であったことを、われわれは忘れてはならない。

この点についてはすでに *Locke Studies* 等の諸論文で詳細に論じているので(6)、ここでその結論だけを示せば、要するにロックが「物そのもの」と言っているものは、われわれの感覚の対象とはならないものであるから、それは例えば「一次性質のみを有する微小粒子」といったように、概念的に考えるしかない。ところが、バークリは、ロック的な「物そのもの」を、あくまで心像的なものとして扱い、その上で、そ

の不可能性を示そうとするのである。

因みに、ロックの「物そのもの」の観念は、経験的に獲得された概念的観念を組み合わせて形成される観念の一つと考えられるものであるが、こういう言い方をすると、「物そのもの」が「観念」と同一視されていると誤解する研究者がいるので、若干それに触れておきたいと思う。

概念としての観念には、ある謎めいた性格がある。この謎めいた性格は、デカルトがよく承知していた。彼は、中世的語法である“realitas objectiva”を用いて、観念が心の在り方“modus”でありながら、それは同時に何かを表すものであることを示そうとした。物そのものについて考えるとき、メタレベルの言い方をすると、その場合にわれわれは「物そのもの」の観念を扱っていることになるわけであるが、その「物そのもの」の観念は、観念である限りにおいて心の在り方でありながら、観念の表す「物そのもの」は、その観念自身が内的なものであるのに対して「心の外」にあるものである。バークリは観念を感覚や心像として理解しようとするので、彼自身が「物そのもの」の概念つまり「物質」の概念に言及する場合には、「観念（idea）」という言い方はせず、代わりに「思念（notion）」という表現を用いている。おもしろいことに、バークリは、観念は感覚や心像であるがゆえに心の中にしかありえないとしながら、「思念」に関しては、それ自身が心の在り方であるとしても、それが表すものが心の中にしかありえないわけではないと考えている。

これが典型的に示されるのは、「神」に関する彼の議論である。神はわれわれには心像としては現れない。もしそうなら、異端的な神観念を持っていることになるからである。神は、言うならば、概念的に考えるしかない。しかし、だからといって、神はわれわれの心の中にしかありえないという結論を、彼は決して持ち出したりはしない(7)。

とすると、バークリがロック的な「物そのもの」つまり彼の言う「物質」を、概念的に扱ったとしたら、いかなる物質を考えようと、〈それは想像力の対象である心像的な観念でしかなく、したがってそれは心の中にしか存在しえない〉という彼の議論は、その場合には適用できなかったに違いない。

こうしてわれわれは、バークリの議論がロック的な観念語法をどのように歪めて成立したかを確認することができる。いずれにせよ、自然科学の仮説的探求の結果、物そのものの新たな措定が促され、それと連動して「観念」語法が成立したにもかかわらず、バークリは、観念語法を維持しつつ、その基盤となる物質措定を拒否したというわけである。

3　ヒューム再考

次に、こうした視点からすれば、ヒュームがどのように見えるかを見ておくことにする。

繰り返すが、もともと観念は、新たな「物そのもの」の措定と連動して、その機能を獲得した。ところが、バークリはそうした「物そのもの」を否定しながら、「観念」語法を維持した。似たような事態は、ヒュームについても見て取るこ

とができる。

ヒュームが、バークリの語法を変えて、バークリ的「観念」を「印象」と「観念」に区別したことは周知のことであるが、そのヒュームの場合も、物そのものとの関係を一旦断ち切って、もっぱら「印象」と「観念」の側から話をすることが許されるかのような、論の進め方をした。その典型的な結果が、あの懐疑論である。印象や観念と外的な物との関係を一旦断ち切った上で、印象や観念から考え始めると、われわれの印象や観念が物とどのように関わっているかは、定かではなくなる。

ここでわれわれは、デイヴィドソンのクワイン批判をもう一度思い起こすのがいいかもしれない。デイヴィドソンは、体表刺激から話を始めるのなら、その彼方の物がどうあるかは定まらないとクワイン的な近位説の立場を批判したが、これは、観念がわれわれの心の直接的対象であるのなら物がどうあるかわからないではないかというお決まりの観念説批判と、まったく軌を一にしている。もともとクワインの体表刺激もロックの観念も、その外にある物との関係において意味をなしていた。それらとの関係を無視した上で、懐疑論的結論を引き出すのは、決してフェアなやり方ではない。

ヒュームについては、彼の因果の考え方がロックによってどのように準備されたかという興味深い問題があるが、これも別の機会に論じたので(8)、ここでは割愛する。

ともあれ、このように、ロック的な自然主義、つまり粒子仮説という科学的発想に従って観念語法を導入したことが、バークリとヒュームによって論理の歪みを受けて崩壊していくという過程として、私は歴史を見ようとしている。この線をさらに延長すれば、われわれはカントに行き着くことになる。

4　カントの場合

ロックの「物そのもの」が、仮説的探求という科学的探求の対象としての地位を持つのに対して、カントの「物自体」は、徹底して、われわれには不可知であるとされている。とすると、そもそも不可知なものが、なぜ存在するとされなければならないのか。この点は、カントの問題として、古くから指摘されてきたところである。カントにとって、われわれが空間中の物とみなしているものと、それが持つ諸性質が、「われわれの内」にある表象でしかないことは当然のことであり、しかも、そうした表象としての現象は、自体的に存在している何かを必然的に要請するとされている。つまり、われわれが知覚している世界は表象の世界であり、しかもその背後に物自体が存在している、というわけである。しかし、こうした考えは、それに先行するデカルト・ロック流の観念説の見解がなければ、理解しえないものであったに違いない。カントの物自体は、この意味で、ロック的「物そのもの」の変質の結果であり、したがってそれは、ロック的な観念の自然主義的論理の下敷きなしには、本来意味をなさないものであったと考えられる。

ロックの「物そのもの」が粒子仮説という「仮説」に基づ

いて措定されていたことを考えると、「物自体」を認識不可能とするカントは、少なくとも感官を触発するものについては、仮説的思考を禁じたことになる。ロックの場合には、「物そのもの」は仮説的に措定されたものであり、彼が仮説的思考を容認する立場を採っているのであるから、その限りにおいて、そこには何ら論理的困難はない。しかし、カントが、このもともとの「物そのもの」を、認識不可能なものとして捉え直すとき、そこに論理の歪みが生じる。認識不可能なものの存在をなぜ主張できるのかという、カントに対して古くから投げかけられてきた疑念は、その意味で、当然のものであった。しかし、なぜカントは、そうした捉え直しを行ったのか。私見によれば、その最大の原因は、カントの学問観、とりわけ、自然科学に関するそれにあったと考えられる。

イギリスでは、すでに一七世紀半ばには、今日の言い方での「科学」の蓋然的性格について、学者の間でコンセンサスが成立しようとしていた。これは、ロジャーズをはじめとする研究者が、すでに確認したとおりである(9)。これに対して、カントは「アプリオリな総合判断」の実例を、数学とともに、自然科学の内にも求めたことからわかるように、科学は、少なくともその核心部分においては、必当然的性格を持たなければならないと考えた。このことは、『純粋理性批判』においてばかりでなく、それとほぼ同時期の『自然科学の形而上学的基礎』においても見出される。例えば彼は、次のように言う。

> 合理的自然学は、その内において基礎をなす自然法則がアプリオリに認識され、単なる経験法則ではない場合にのみ、自然科学の名に値する(10)。

こうしたカントの学問観からすれば、彼がアプリオリな総合判断の可能性を論じる枠組みの基礎となる部分に、仮説的に措定されるものを用いることは、考えられない。事実、カントは、『純粋理性批判』第一版の「序文」の中で、次のように述べている。

> 確実性に関して言えば、私は自分自身に次のような判決を言い渡した。すなわち、この種の考察においては、憶測は許されず、そこでは仮説に似ているだけですべて禁制品となり、どれほどの安値であっても売りに出すことは許されず、見つけ次第差し押さえなければならない、と。なぜなら、アプリオリに確定されるべきあらゆる認識は、まったく必然的であると見なされることを欲するとそれ自身告げており、すべての必当然的（哲学的）確実性の基準であるべき、したがってその手本ですらあるべきすべてのアプリオリな純粋認識の規定は、なおさらそうだからである(11)。

しかし、その一方で、外なるものの存在がなければ、内なるものの、「内なるもの」としての性格を確保することができないばかりでなく、自らの立場が、バークリの観念論と同一視されてしまうことになる。しかも、「アプリオリな総合

判断」の可能性を確保するためには、それに必要な感性の純粋形式と、純粋知性概念とを、すべてデカルト的な直接的確実性の及ぶ圏域（つまり心の中）に、取り込む必要があった。その結果が、物自体に対する「認識不可能性」という性格づけであったと考えられる。

カントがこの作業を行うとき、ロックの枠組みについて彼が感じていた問題を念頭に置いていたであろうことは、次の断片からも推し量ることができる。

> ロックは……これらの概念に到達する機会、すなわち経験を、〔それらの〕起源と見なすという誤りを犯した。にもかかわらず、彼はまたそれらを経験の限界を超えて使用した(12)。

『人間知性論』のロックの発言の中で、彼が経験から得た概念（観念）を「経験の限界を超えて使用する」と言えるものには、知覚不可能な粒子としての物そのものを仮説的に措定する際に、経験から得た観念をそれに適用する場合が含まれる。今引用したカントの言葉は、ロックの措置を非難するものであるが、それからすれば、カントが物自体の存在を認めるとしても、自分が経験にのみ正当に適用されるとした諸規定を物自体に適用することができないのは、当然のことと考えられる。

カントが物自体を認識不可能としたことは、ロックが物そのものについては「知識」はきわめて限られているとしたことに、呼応している。今日では、仮説的探求の成果が蓋然的なものでしかないにもかかわらず、その蓋然性の度合いは一般にきわめて高いと考えられている。しかし、ロックの時代の仮説的探求の状況からして、ロックは仮説的方法の有用性を認めつつも、その成果に対しては、控えめな発言をせざるをえなかった。カントは先の絶対的確実性を科学に求める傾向により、仮説的探求に対するロックのこの否定的評価を徹底させ、そのこともまた、物自体の認識不可能性の見解を支えるものとなったと思われる(13)。

結　論

以上、もともと自然主義的性格を持っていたロック的枠組みがどのようにして変質していったかを、概観してきた。カントの表象説に関する議論は付け足しであるが、いずれにせよ、経験論がもともと自然主義的性格のものであり、それがいくつかの仕方で変質していったという私の見方の基本は理解されたものと思う。この見方は、ロックはクワインが思っていた以上にクワインに近かったということを示そうとするものでもある。認識論そのものを否定しようとするリチャード・ローティは、だからロックもクワインも、不要なものに無駄にエネルギーを使ったことになる、と言うのだが(14)、認識論が科学の延長線上に成立したとすれば、そうした営みが無駄かどうかは即断できないだろうというのが、ローティに対する私の回答である。

注

＊小論は、二〇〇七年三月二八日に同志社大学寒梅館ハーディーホールで行われた日本イギリス哲学会第三一回研究大会シンポジウムⅡ「古典経験論と分析哲学」の第一報告に加筆したものである。筆者が所属していない日本イギリス哲学会にご招待くださったことに対し、同学会のみなさまに心より御礼申し上げる。

（1） W. V. Quine, "Five Milestones of Empiricism," in idem, *Theories and Things* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1981), p. 67.

（2） この件については、富田『アメリカ言語哲学の視点』（世界思想社、一九九六年）第Ⅱ部第一章、同改訂増補版『アメリカ言語哲学入門』（ちくま学芸文庫、二〇〇七年）第Ⅲ部第七章、および Yasuhiko Tomida, "Descartes, Locke, and 'Direct Realism'," in Stephen Gaukroger, John Schuster and John Sutton (eds.), *Descartes' Natural Philosophy* (London: Routledge, 2000), pp. 569–575 を参照されたい。

（3） クワインの「近位説」については、Yasuhiko Tomida, *Quine, Rorty, Locke: Essays and Discussions on Naturalism* (Hildesheim, Zürich and New York: Georg Olms, 2007), pp. 5ff. を参照されたい。

（4） Donald Davidson, "Meaning, Truth and Evidence," in Robert Barrett and Roger Gibson (eds.), *Perspectives on Quine* (Cambridge, Mass.: Blackwell, 1990), p. 74.

（5） 以上のロック解釈の詳細については、Yasuhiko Tomida, *Idea and Thing: The Deep Structure of Locke's Theory of Knowledge*, in Anna-Teresa Tymieniecka (ed.), *Analecta Husserliana*, 46 (Dordrecht: Kluwer, 1995), pp. 3–143; idem, "Locke's Representationalism without Veil," *British Journal for the History of Philosophy*, 13 (2005), pp. 675–696 等を参照されたい。

（6） Yasuhiko Tomida, "Locke, Berkeley, and the Logic of Idealism," *Locke Studies*, 2 (2002), pp. 225–238; idem, "Locke, Berkeley, and the Logic of Idealism II," *Locke Studies*, 3 (2003), pp. 63–91 参照。

（7） 「思念（notion）」に関する以上の議論については、Tomida, "Locke, Berkeley, and the Logic of Idealism II," pp. 81–86 を参照。

（8） この件については、Yasuhiko Tomida, "Ideas Without Causality: One More Locke in Berkeley," *Locke Studies*, 11 (2011), pp. 143–148 を参照。

（9） G. A. J. Rogers, "Boyle, Locke, and Reason," *Journal of the History of Ideas*, 27 (1966), pp. 214–215; M. J. Osler, "John Locke and the Changing Ideal of Scientific Knowledge," *Journal of the History of Ideas*, 31 (1970), pp. 3–16 参照。

（10） Immanuel Kant, *Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft*, in *Kants gesammelte Schriften* (Berlin: Georg Reimer/Walter de Gruyter, 1902–), iv. p. 468.

（11） Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, ed. Jens Timmermann (Philosophische Bibliothek, 505; Hamburg: Felix Meiner, 1998), AXV.

（12） Immanuel Kant, *Handschriftlicher Nachlaß: Metaphysik*, in *Kants gesammelte Schriften*, xviii. p. 14.

(13)　私のこうしたカント理解については、Yasuhiko Tomida, "Locke's 'Things Themselves' and Kant's 'Things in Themselves': The Naturalistic Basis of Transcendental Idealism," in Sarah Hutton and Paul Schuurman (eds.), *Studies on Locke: Sources, Contemporaries, and Legacy* (Dordrecht: Springer, 2008), pp. 261-275を参照していただければ幸いである。

(14)　ロックとクワインに関するローティのこの見方の一端は、一九九五年八月のローティの手紙に見出される。Tomida, *Quine, Rorty, Locke*, p. 86参照。